

「外交（史）研究班」（代表：青山瑠妙）活動記録

【2007 年度】

[冷戦史 WS]

第 1 回冷戦史 WS

日中韓ワークショップ「アジア冷戦史」（中国外交〈史〉研究会主催）

日時：2008 年 3 月 17 日（月）、18 日（火）

場所：早稲田大学 41-31 号館 2 階

概要：第 1 セッション「朝鮮戦争とアジア冷戦」では、沈志華氏が、対日講和と停戦交渉を 4 つの時期に分けて分析し、朝鮮戦争は局地戦争であり、また人為的にコントロールされた「限定戦争」だったと指摘した。下斗米伸夫氏は、40 年代後半の冷戦と核兵器の強い関連性に注目、ソ連が北朝鮮に目を向けたのはウラン獲得が動機だったと毛沢東と坂田昌一（物理学者）が接触した事例を挙げて考察した。金栄作氏は、朝鮮戦争の起源を中国の学界はどう分析しているのか、38 度線を越えたとき正当な防衛戦争ではなくなったとする韓国での議論に対する中国側の見解如何、などの疑問を提起した。

第 2 セッション「ベトナム戦争」では、まず戴超武氏が、ベトナム戦争時の米国の対中情報工作を分析し、中ソ対立と文革が米国のベトナム戦争を拡大させる重要な役目を果たしたという結論を導き出した。菅英輝氏は、日米関係の視点からベトナム戦争を取り上げ、ベトナム戦争のエスカレーションと時を同じくして誕生した佐藤政権に注目して発表を行った。自由討論では、「冷戦」という言葉の再定義、同盟関係のコストシェアリングについて議論した。

第 3 セッション「米中和解」では、まず李丹慧氏が、ベトナム戦争における米中ソ及び中ソ越の 2 つの戦略三角関係が形成される過程における米中ソ越の外交政策の再定義とそのプロセスを論述した。コ・イル氏は、1971 年の米中接近に対する北朝鮮の反応について報告した。増田弘氏は、1972 年米中接近に限定した日本の反応を報告した。自由討論では、米中会談の勝利者は結局誰だったのかを中心に議論した。

総括セッション「アジア冷戦の構造」では、田中孝彦氏が、「冷戦」という用語が持つ意味に迫り、冷戦を「グローバルガバナンス」の一形態として捉え、一定期間に存在した歴史的「システム」であると位置付けた。崔丕氏は、東アジアの冷戦の構造とその特質について発表を行った。伊藤剛氏は、アジアにおける冷戦の特徴と米国の役割を分析した。自由討論では、同盟関係におけるコスト負担、アジア冷戦の特徴、米中接近の特殊な意味合いなどを議論した。

総括した毛里和子氏が「4 つの逆説的な結論」を提示した。1) 冷戦が含意する「大国主義」的なものから自由になる必要がある。2) 熱戦である朝鮮戦争とベトナム戦争を「冷戦」で括ることに疑いをもつべきだ、3) アジアの熱戦で米国はいずれも勝利していない。

にもかかわらず冷戦後米国の「覇権」が構築されるのはなぜか。4) 西と東の同盟関係の違いや同盟内部での関係変化に注目すべきだ。要は、同盟のコストはどの程度だったのか、誰が負担したのか、負担の変化によって国際構造が変容したのではないか。

最後に田中孝彦氏が本ワークショップの定例化を提案し、閉会した。27名が参加した。

[研究会]

①第一回中国外交史研究会——「中国における中国外交研究の現状」ならびに

「改革開放への政策転換——中越戦争や全方位外交への歩み」

日時：2007年5月11日

場所：早稲田大学41-31号館2階会議室

報告者：林暁光（中共中央党校）

概要：まず、林氏は中国における中国外交研究の現状について、①研究機構、②研究分野、③研究資料、④研究成果、⑤研究方式、⑥研究目的、⑦研究特徴などの角度から詳しく紹介した。それから、中国の改革開放と外交戦略の調整について、第一に、外交調整の内容を任務、政策、理念から考察し、第二に、外交調整の要因を、改革開放と経済建設、国内外環境に対する認識、中日・中米・中ソ関係の調整、国内外要因の相互影響などの角度から述べ、第三に、中越戦争を事例として、その政策決定、政策目標、結果および影響などについて詳しく分析した。

林氏の報告に対して、参加者を含めて次のような議論が展開された。①「外交調整」か、それとも「外交転換」か、学術用語の的確性について、②1970年代末から1980年代前半にかけて中国外交の転換の具体的なタイム・テーブルに関して、③研究資料の制約があるもとの研究方法について。この研究会には約25名が参加した。

②第二回中国外交（史）研究会——『東アジア国際政治史』の書評」

日時：2007年10月5日（金）

場所：早稲田大学41-31号館2階会議室

概要：本報告では、川島真・服部龍二編『東アジア国際政治史』（2007年、名古屋大学出版会）について、毛里が議論を展開した。

具体的に、第一に、アジア各国では「心地よい自国史」を描こうとする傾向があり、本書がマルチ・アーカイブ研究の前提に立って「一国史」の枠組みを超えようとした点は高く評価できる。第二に、本書が東アジアの歴史に関する多様な学説を整理・提示し、新たな国際政治史を論争的に組み立てた点、また「東アジアという場」を意識して新しい国際政治史を提示しようとした点は高く評価できる。第三に、外交史と国際政治史は性質が全く異なる。単に各国の外交史を組み立てても国際政治史にはならない。その違いを明示し、メインアクターについて再考し、地域秩序論などを組み入れる必要があったのではないか。第四に、東アジアの国際関係にとって米国の役割はきわめて重要である。その点について

本書の分析は少ないし、とくにソ連ファクターについては、考察がほとんどないのが残念である。

それに対して、本書の編者の一人である川島氏、著者の一人である松田氏が積極的な答弁を行い、多くの参加者が活発な質疑応答を行った。本研究会には16名が参加した。

③第三回中国外交（史）研究会——「中国外交の新展開」

日時：2007年12月14日（火）

場所：早稲田大学41-31号館2階会議室

報告者：呉寄南（上海国際問題研究所学術委員会副主任）

概要：本報告では、胡錦濤政権の外交に対する取り組みが紹介、分析された。

第一に、胡錦濤の5年間の中国外交における全方位、多チャンネル、多国間等の傾向について。胡錦濤政権出発当時は、軍機衝突事件や台湾問題で対米関係は悪化、小泉首相の靖国参拝問題で対日関係も悪かった。だが対米、対日ともかなり改善され、台湾との緊張も一時より緩和した。

第二に、現指導部は外交に積極的で、この5年間政治局常務委員会は44回専門家を招いて勉強会を開催、うち半分は外交関連だった。海外の指導者との交流にも積極的で、多国間外交も積極化している。政策決定における学者・シンクタンクの重要性が確実に増大している。

第三に、経済成長で中国の国力が増大している。米国がアフガン・イラク問題で泥沼にはまり中国の協力を求める場面が増えた。2004年4月、外交スローガン協議のため政治局会議が開かれ、「平和的台頭」論は「平和的発展」と呼ぶことになった。対外的には「調和のとれた世界（和谐世界）」論が打ち出された。

第四に、今後中国外交は次の挑戦を受けよう。①国際世論の厳しさ。西側にとって中国の政治制度は異質、経済発展はあまりに急激である。②台湾問題。取扱いを一步間違えれば大きなトラブルになる。③国内のナショナリズム。過剰な被害者意識、コンプレックスのため外国に過敏に反応する。④縦割りの外交政策決定メカニズム。突発事件に対する迅速な対応・政策決定が難しい。

報告後、参加者ときわめて活発な議論が行われた。本研究会には16名が参加した。

④第四回中国外交（史）研究会——青山瑠妙『現代中国の外交』評論会

日時：2008年1月15日（土）

場所：早稲田大学41-31号館2階会議室

評者：毛里和子（早稲田大学）、伊藤剛（明治大学）

概要：今回は青山瑠妙氏の近著について、ふたりの評者からのコメントや質問をめぐって議論した。なお川島真氏（東京大学）は『外交フォーラム』に寄せた書評を研究会に提出した。両評者から以下のようなコメントおよび質問が提起された。1) 従来中国の指導者の対外

認識や政策決定の説明に終始することが多かった日本の中国外交研究への挑戦である。アクター別に中国の対外関係を分析し、言説ではなく対外行為を見ており、中国外交の言説は硬直的だが現実行動は柔軟であるとのメッセージがクリアである。2) 中国の「パブリック・ディプロマシー」に焦点を当て、毛沢東時代から今日まで対外広報を重視してきたことを検証した。この視点は特に 2000 年代以降の中国外交を分析する際に重要である。3) 「外交」と「外事」という概念の区別を行った。外事はすべての対外活動の総称であり、外交＝中央政府の対外活動、という考え方を提示した。4) 1978 年～1979 年の転換について議論が足りないのではないか。5) ある国の外交分析には一定の理論、および枠組みが不可欠ではないか。本研究会には約 20 名が参加した。

【2008 年度】

[研究会]

①第一回「外交（史）研究班」研究会

日時：2008 年 7 月 11 日

場所：早稲田大学 41-31 号館 2 階第 2 会議室

報告者：益尾 知佐子（早稲田大学現代中国研究所客員講師）

議題：John W. Garver, "China and Iran: Ancient Partners in a Post-Imperial World" (Univ. of Washington Press, 2006) への書評と中国外交研究の方向性

概要：益尾氏は Garver 教授の近著を紹介し、それへの書評を行った上で、本書が日本の中国外交研究に与えるインプリケーションについて述べた。本書の分析手法は、中国の全体的な対外戦略、あるいは国際政治における中国（またイラン）の役割を検討する上で非常に有効である。参加者との討論では、中国と第三国（米国や日本などよく研究対象になっている国とは違う小国）との研究を進めることでより立体的な中国理解が可能になるという意見がある一方、米国人の中国研究の分析視角に対する批判や、Garver 的な分析ではとらえきれない問題点などが議論された。本研究会には 9 名が参加した。

②第二回「外交（史）研究班」研究会

日時：2008 年 11 月 14 日

場所：早稲田大学 41-31 号館 2 階第 2 会議室

報告者：キラール・アッティラ（早稲田アジア太平洋研究科院生）

議題：中国と EU — 『The International Politics of EU-China Relations』の書評を中心に

概要：報告者は David Kerr と Liu Fei が編集した『中国と EU——中欧関係の国際政治』の内容紹介を中心に報告した。参加者との討論では、①ナショナリズム、アイデンティティなどの基本概念の意味合い、②中国が求めている国際関係の民主化と、既存の国際規範とはどのような関係か、③中国のアフリカにおけるプレゼンスに対する EU の態度はどういうものか、④中国をどのように国際システムに組み込むかなどの問題について議論された。本研究会には 12 名が参加した。

③第三回「外交（史）研究班」研究会

日時：2008 年 12 月 18 日

場所：早稲田大学 41-31 号館 2 階第 2 会議室

報告者：陶 文釗（中国社会科学院 米国研究所研究員）

議題：改革開放 30 周年と米中関係

概要：報告者は米中国交樹立以降 30 年間の米中関係を、3 つの時期に分けて述べた。3 つの時期は、米中国交樹立から天安門事件まで、天安門事件以降 9・11 事件まで、9・11 事件以降である。

報告者は、時系列的に、米国の政権に沿って、30年間の米中関係の変遷を鳥瞰的に整理した。米中関係の重要な節目にある事例を、具体的に米中双方のアクターや、交渉プロセスなどから非常に詳しく分析した。米中国交樹立過程、台湾問題、米中関係におけるソ連要素などの分析が特に興味深い。参加者との討論では、①2001年以降の安定的な米中関係がなぜ成り立つか、②1982年の独立自主政策についてどう認識するか、③米中関係における台湾問題はどのように理解するか、④中国の対米政策をどう評価するかなどの問題について議論された。本研究会には15名が参加した。

【2009 年度】

[冷戦史 WS]

第 2 回冷戦史 WS

「多元的視角からアジア冷戦を考える」国際ワークショップ

日時：2010 年 3 月 16 日

場所：中国上海・華東師範大学中山北路キャンパス逸夫楼

共催：華東師範大学冷戦国際史研究センター、NIHU 現代中国地域研究早稲田拠点

概要：NIHU 現代中国地域研究早稲田拠点の外交（史）班は華東師範大学冷戦国際史研究センターと、2008 年 3 月 17-18 日に 1 回目の「アジア冷戦史」ワークショップを開催した。2 回目となる今回の国際ワークショップは、開催場所を上海に移し、日本側から 7 名の参加者が派遣された。本ワークショップは、5 セッションを設け、報告者・発言者が合計 19 名、討論者が 9 名参加した。また第 4、5 セッションの間に、華東師範大学による、毛里和子教授（早稲田拠点代表）への顧問教授の授与式が行われた。具体的には以下のプログラムで開催され、非常に充実した一日となった。50 名ほど参加した。

8：30-9：00 司会 沈志華（華東師範大学冷戦国際史研究センター主任、教授）

開会挨拶 張濟順（華東師範大学校務委員会主任）

開会挨拶 毛里和子（早稲田大学現代中国研究所所長）

9：00-10：20 第一セッション

座長：増田弘（東洋英和女学院大学教授）

報告者及び報告タイトル：

毛里和子（「毛沢東時代の中国外交を論ずる：中ソ同盟を例として」）

沈志華（「強いられる同盟——スターリンと中国共産党政権の成立と増強」）

松村史紀（大阪国際大学講師、「戦後秩序の中の中ソ同盟（1945 年）」）

牛軍（北京大学教授、「冷戦期中国外交の経緯」）

討論者：山本武彦（早稲田大学教授）、楊奎松（華東師範大学教授）

10：30-11：50 第二セッション

座長：徐思彦（社会科学文献出版社編集者）

報告者及び報告タイトル：

張紹鐸（上海外国語大学副教授、「雲南・ミャンマ边境における国民党軍残部の活動と第一次台湾へ撤退の始末」）

楊奎松（「新中国政府が米国文化の影響を排除するプロセス」）

李丹慧（華東師範大学教授、「1950-70 年代の中越関係に関する幾つかの問題」）

戴超武（華東師範大学教授、「中共中央の“マクマホンライン”に対する認識と中国の中印境界問題の処理（1951-1962 年）」）

討論者：毛里和子、牛軍

14 : 00-15 : 20 第三セッション

座長：青山瑠妙（早稲田大学教授）

報告者及び報告タイトル：

増田弘（同前、「1950年代における日中国交正常化の可能性——石橋湛山を中心に」）

国吉知樹（早稲田大学准教授、「吉田茂の対中国政策構想と日英関係」）

崔丕（華東師範大学教授、「冷戦転換期の日米関係——東芝事件への歴史的考察」）

徐顕芬（早稲田大学客員講師、「アジア冷戦転換期における日中関係の調整——中国の日本から政府借款の導入を事例として」）

討論者：山本武彦、余偉民（華東師範大学教授）

15 : 30-17 : 00 第四セッション

座長：李丹慧（華東師範大学教授）

報告者及び報告タイトル：

趙学功（南開大学教授、「米国、台湾と朝鮮戦争」）

徐友珍（武漢大学教授、「無視された役——英国と朝鮮戦争の捕虜送還問題」）

陳波（華東師範大学講師、「アイゼンハワー政府と米国の朝鮮南部における核配置」）

周娜（華東師範大学講師、「米国の台湾海峡危機の政策決定過程におけるアイゼンハワーとダレスの地位と役割」）

梁志（華東師範大学講師、「“青瓦台事件”、“プウェブロ”号危機と米韓関係」）

討論者：国吉知樹、石源華（復旦大学教授）

17 : 10-17 : 25 華東師範大学による、毛里和子教授への顧問教授の授与式

司会者：崔丕

発言者：張濟順、毛里和子

17 : 30-18 : 30 第五セッション 「アジア冷戦研究の展望」

座長：崔丕

自由討論

[研究会]

①第一回「外交（史）研究班」研究会

日時：2009年6月9日

場所：早稲田大学19号館710室

報告者：趙全勝（Professor, American University）

議題：日中関係と米国ファクター

概要：報告者はまず、第二次世界大戦後の日中関係を、1949-72年の「政冷経冷」期、72-89年の「政熱経熱」期、89-2003年の「政冷経熱」期、03-06年の「政冷経冷」期に区分し、06年以降の日中関係は「政熱経熱」になるのではないかと問題提起した。次に、日中関係におけるネガティブ・ファクターとして、歴史、台湾、領土、エネ

ルギー競争、認識相異などを挙げ、ポジティブ・ファクターとして、経済的相互依存、北朝鮮問題、東アジア共同体、学生交換の増加、指導者の相互訪問などを挙げた。そして、日中関係における米国ファクターについて、ブッシュ政権の世界戦略の転換、アジア政策の優先課題（反テロ、北朝鮮核危機）、中国政策（関与か封じ込めか）などから議論した。最後に日中関係が岐路に立つことを指摘し、戦略的思考が重要であると指摘した。質疑応答では、①日本の対中 ODA をどう認識するか、②日本は常に第一強国と同盟を組むのが本当か、③現在に日中関係に対してどう評価するか、④六者協議についてどう見るべきか、などの質問がでた。アジア太平洋研究科の 50 名ほどの学生が参加した。

②第二回「外交（史）研究班」研究会

日時：2009 年 7 月 20 日

場所：早稲田大学 41-31 号館 2 階第 2 会議室

報告者：牛軍（北京大学国際関係学院教授）

議題：現代中国外交研究の新傾向——雑感

概要：報告者はまず、21 世紀初め（前の 5 年間）の中国外交研究は、過去 20 年間の研究状況と比べても質と量の両方で大きな発展を成し遂げたと述べた。研究の視点について、学界が「中国の世界」と「世界の世界」というテーゼを双方向で議論し、特に「中国は世界の一部」という一致した視角で研究し、「中国と世界とは密に不可分」とはどういう程度のものかを真剣に考え、中国社会が外部世界との相互連動のなかでどのように変化したかを探究する、などが重要と指摘した。次に、中国外交研究の成果を、「歴史と哲学の思考」、「戦略と政策」、そして「対外政策」という 3 つのカテゴリに分類し、その特徴を分析した。中国内政と中国外交との関係に関する研究は中国外交研究において避けて通れない問題であること、「戦略」研究が多いことと対照的に「政策」研究が非常に少ないことが問題であること、大国関係研究が多いことと対照的にそれ以外（国際組織、NGO 組織、発展途上国との関係など）の研究が非常に少ないこと、などを指摘した。最後に、理性的な態度をもって中国と外部世界との関係を対処するのが非常に重要で、中華民族は理性を民族の魂に刻み込むべきだとの指摘が特に興味深い。報告者の指摘をめぐって活発な議論が行われた。本研究会には 16 名が参加した。

③第三回「外交（史）研究班」研究会

日時：2010 年 2 月 2 日

場所：早稲田大学 9 号館 917 会議室

報告者：戴東陽（中国社会科学院近代史研究所副研究員）

議題：晩清駐日使節団と近代日中関係

概要：報告者は清末の駐日使節の任期にそって、各使節がそれぞれ直面した日中関係の問題をいかに対処していたかを時系列的に分析した。具体的には、①第一期何如璋使節団と日中関係の二大問題（琉球問題、条約改正問題）、②黎庶昌使節団と琉球問題、③徐承祖使節団と日中『天津条約』、④歴代駐日使節団と金玉均事件などについて述べた。報告者は先行研究の問題点、特に意見が分かれているポイントを指摘しながら、自身の観点を実証的に展開した。参加者からは、①台北の資料の利用、②日本側研究者の観点の整理、③使節の政治外交活動だけではなく、文化情報活動への注目、④琉球、朝鮮など対象側の資料の利用及び見解の整理、などが必要ではないかと指摘された。また自由討論では、①使節の任期にそった時系列的な分析を行ったが、それによって対日政策は変わったか、外交システムは変化したか、②使節団と本国の総理衙門とはどういう関係にあるか、③使節団が外交政策決定においてどのような役割を果たしたかなどの問題について議論された。本研究会には 15 名が参加した。